



巻 頭 言

管 見 ・ 妄 語 ・ 手 取 除 草

クミアイ化学工業(株) 研究開発本部長 前田 泰三

我が家の玄関先は、日当りの良くない割には雑草がはびこるのを嫌って、幅2m足らずの私道部分に、小石を5cm位に敷き込んでもう十年以上になる。それでも、正に雑草、で方々に顔を出して来る。久し振りに抜き始めたら主にムラサキカタバミで、地上部はナヨナヨしているが地下部は仲々どうしての存在である。小球を取りこぼすと元の木阿弥になるので、全部を掘り起こすように、周囲の小石をのけたりして結構手間がかかる。ラウンドアップなども承知はしているが、鱗茎の大きな塊をつけた主根を、首尾よく抜き取る楽しみは、決して小さなものではないので、紺屋の白袴をきき込み、ジックリ腰を下してとりかかると、一米四方でも20分間では片つかない程である。

農地と専門家のお百姓さんという取り合わせとは全く違う場面だが、昔の手取り除草(水田に限らず)の大変さも想像できる気になって来た。

商売柄、つついそっちの方に気が廻るのだが、作物を餌にする病害虫もさることながら、作物と縁つづきの植物で、しかも、人為的に一種の奇形化をした、従って生活力の低下している作物と競合しようと、常時圧力をかけて来る雑草とは全く厭らしい存在である。害虫や病気が出ないことはあっても雑草が生えないことはありそうにない。雑草も生えきれないような所で、作物が育つ訳がないということだろうか。

一方では、米国でもいまだに鋤での除草を大耕地でやっているのを見ては来たが、少なくとも戦後の日本で水田中心に除草時間を数十分の

一にカットし、農業自体を兼業でもやって行けるように、惹いては他産業へのシフトと繁栄を支えた大きな要因は除草剤の普及にある。このことは諸先達を始め皆さんの努力のおかげであると所々方々で言われ、関係する人は誰も納得することだが、他の先進技術、特に化学関係のそれと同じく、所謂「環境論者」には認知して貰えぬようである。幾昔か以前のサロン〇〇キストを思い出すと言ったら怒られるだろうけれど、自分の足下を見ない空論に堕ちないように注意して欲しいものだし、我々自身も興奮せずジックリ・シコシコと、こういう向きにも一般の人にも対処して行くことだと思う。農薬学会、農薬工業会のシンポジウム、広報活動、本誌に連載の近内教授その他の方々の意見などなどを、もっと多くの一般の方々に、先入観を持たずに耳に入れ、理解して貰うような雰囲気ができれば何よりも有難い。いつまでも10年、20年昔の塩素剤の話を下敷きにして挙げ足を取られているのは、たまった話ではないなどと取り止めのことを腰を伸ばしながら考えた。

腰が痛くなったのも、思ったより時間がかかったためなのだし、目の前の現実として除草剤の有り難みの一端を覗いた気になったのも本心である。今ある技術と製品を大事に活かし或は発展させ、国全体を、生活全体を、より快適に造って行くのは、技術者を中心とした我々の責務でもある。それが、全世界に広げられ利用されるのであれば、これに過ぎることはないなどと、腰を伸ばしたついでに暑い空を見上げて想った。